

## 第一部会（第21期・第3回）議事要旨

### I 日 時

1. 第1日目  
平成21年7月25日(土) 13:00~17:00
2. 第2日目  
平成21年7月26日(日) 10:00~12:00

### II 場 所：北海道大学 人文・社会科学総合研究棟4階 W409号室

### III 出席者

1. 第1日目（出席：41名(1名) 欠席： 名）
  - (1) 会員等  
廣渡部長、小林副部長、木村幹事、山本幹事、秋田、秋山、吾郷、淡路、井田、猪口(邦)、猪口(孝)、今田、今西、内田、江原、大沢、戒能、木下、桑野、小谷、桜井、櫻田、佐藤、庄垣内、白澤、鈴村、高橋、田口、辻村、直井、野家、長谷川、樋口、平松、廣瀬、藤井(省)、藤田(英)、前田、丸井、山岸、油井、河田連携会員
  - (2) 事務局  
竹林事務局長、中島専門調査員、小栗、齋藤
2. 第2日目（出席：42名(3名) 欠席： 名）
  - (1) 会員等  
広渡部長、小林副部長、木村幹事、秋田、秋山、吾郷、淡路、井田、猪口(邦)、今田、今西、内田、江原、大沢、戒能、木下、桑野、小谷、桜井、櫻田、佐藤、庄垣内、白澤、白田、鈴村、高橋、田口、辻村、直井、野家、長谷川、樋口、平松、廣瀬、藤井(省)、藤田(英)、前田、町野、丸井、山岸、油井、小林(潤)、増渕、西村
  - (2) 事務局  
竹林事務局長、廣田参事官、中島専門調査員、小栗、齋藤

### IV 議 事

#### 《第1日目》

1. 分野別委員会からの報告（「日本の展望」素案の審議経過等の報告）
  - (1) 言語・文学  
総論（言語と言語研究）、展望と提言について（日本語のデータ・ベースの構築、英語教育の方針の確立、日本語の公共的言語の再生、非母語定住者と日本語

教育、「複数外国語教育」の復活)

(2) 哲学委員会「共に生きる価値を照らす哲学へ」

- ① 考察の社会的背景
- ② 哲学・思想・文化領域における研究・教育固有の役割(3つの力の養成)
- ③ 研究の課題(3つの力を養成するために)
- ④ 今後の展望と可能性

(3) 史学「歴史学と考古学を取り巻く特異な状況について」

- ① マスメディアにおける歴史の描き方の問題性(クイズ番組、NHK大河ドラマなど)。歴史的事実に基づく正当な歴史認識が必要。そのためには、歴史の事実の土台となる文書などを保存するためのアーキビスト等をもっと大事にすべき
- ② 教科書問題など、日本史にかかわる偏狭なナショナリズムがある。日本史研究、考古学研究は偏狭なナショナリズムに利用されやすい。それを避けるためには、日本史研究、考古学研究を世界に発信するシステムを作るべき。日本史研究、考古学研究を世界言語的チームに翻訳するシステム、そのためのセンターを構築すべき。

(4) 心理学

心理学とは何か、心理学の独自性と役割・課題、社会的ニーズへの対応、グローバル化への対応、女性ポストク支援(女性ポストク特有の問題とキャリアパス)。

(5) 教育学

「質」と「平等」を同時追及する教育の総合的研究の必要性、教職の高度化・専門職化

(6) 政治学

政治学への社会的期待(市民教育、公共政策大学院の試み、地域大学コンソーシアムの設立、公職担当者への教育)、政治学の主要テーマ、新たな「知域」、政治学を展望する

(7) 法学(4つの現代的課題)

- ① 立法の時代への対応
- ② 社会の変化への対応(海外への情報発信の必要性、法システムを統合的に把握する視座の獲得、権力の分散化と法の運用方法の変化への対応、グローバル化と法の対応、持続可能な発展と法律学)

- ③ 基礎研究の促進・奨励
- ④ 法学研究の制度的条件の改善(法科大学院と法学研究のバランス)

#### (8) 地域研究

複合領域としての地域研究、人文・社会科学内の「学際性」と「文理協働・融合性」（グローバルな危機克服のため）、地域研究の貢献（「文化の多様性」尊重と「持続可能な発展」戦略の統合、平和的な世界システムへの移行の工夫、グローバルイゼーションによる内外格差の拡大、冷戦終結後の地域紛争、国際テロ活動の多発、ひとの国際移動の活発化、国内外の地域情報の整備）、若手養成

#### (9) 経済学

今回の経済危機による、効率性と厚生性の二律背反の提示(ミクロレベルでも)、経済のグローバル化による資本主義の限界の露呈とマクロ経済学の枠組みの見直し、経済学のグローバル化の必要性、社会のニーズへの対応(新しい社会パラダイムへの対応)、若手人材育成(学部教育、他分野との関連と専門職大学院、学際的な研究者養成)

#### (10) 社会学

社会学は社会学(仮説提案)と社会福祉学(問題解決)を含む。「対話の学」としての社会学。社会の質の劣化→良質な社会構築のための社会学の役割。社会学における課題(領域横断的な社会学の性質の強化、少子高齢化への対応)。社会学の展望(社会、歴史、他の学問との対話)。社会福祉学の課題(社会福祉に従事する人の専門職化)、社会福祉学の展望。

#### (11) 経営学

資本市場のグローバル化と会計における国際的動向の重要性(国際財務報告基準への流れ、研究の海外発信)、社会的ニーズ(コーポレート・ガバナンス、CSRに会計学が果たした役割)、情報化(言語の統一)

## 2. 日本の展望第1次案の報告

### (1) 目次

第3章を第2章から独立させて項から節に上げ、第5章も第4章から切り離し、独立した章とした。

### (2) 第1章

人文・社会科学の役割について。分量が長いので、カットする必要がある。

### (3) 第2章

人文・社会科学が立ち向かう課題について。

各タイトルは、各分野別委員会からの報告を踏まえて執筆し、概念、言葉を使っている。実現すべき社会を描いた。最も重要なメッセージとなる。

(4) 第3章

困難な状況に対して、「こうしなければならない」ということを大づかみに書いたが、作業分科会での議論は踏まえている。

(5) 第5章

各分野別委員会について。報告書をもとに。何を言っているのかわかるようなタイトルをつけていただいた。

《第2日目》

3. 幹事会等からの報告

(1) 『知のタペストリー』シリーズについて

各部以下のようなもので企画している。

一部：初めてのイスラム学、ジェンダー研究に関して、持続可能な福祉とは何か、

二部：初めての細胞進化学、DNAに探る人間のルーツ、脱タバコ社会を目指して

三部：宇宙に生命を探る、宇宙に生きる

(2) 大型の研究に対する支援について

人文・社会科学は、大型研究の議論に際し、学術をサポートする仕組みについても検討する必要がある。

(3) 大型研究計画検討分科会からの報告

① E S F R I について

どのような大型研究が必要であるか、EU、欧州の科学者コミュニティが中心となってロードマップを作成。人文・社会科学も大型研究の重要な位置を占め、研究計画が提出されている。

② 大型研究計画分科会も、これをもとに、日本の人文・社会科学から、どのような計画が出せるか、2回目に大型研究・調査について調査。またこの調査結果をもとにある分野でどのような大型研究・インフラ整備が必要かについてのパースペクティブに関するヒアリングを計画。

4. 課題別委員会からの報告(大学教育の分野別質保証のあり方検討委員会)

教養教育には様々な考え方があがるが、一定の方向性に基づいて書く必要がある。市民性の涵養としての教養教育、そのような現代的レリバンスに重点を置きながら、

古典を学ぶことの重要性、理系のための人文・社会科学リテラシーと文系のための科学リテラシー、専門教育と教養教育の関係などについて書く予定である。

また、教養教育における3つの視点、即ち①学問にかかわる分野の主体性・自律性(大綱化以降の制度・外部からの学問に対する要請に対する日本学術会議からの提言として)、②多様性(学問の分野の多様化と教養教育とのつながりについて。文理は融合するのか、多様性を認めつつエッセンスを抽出していくのか。学生の多様性。そのような多様性に対応しうる教養教育のエッセンスとは。教養教育の哲学について考える必要性)、③統合性という点からの教養教育、専門分野間での協働、外部との協働。21世紀市民。学部で学生を育てていくことの本質的な意義について検討し、専門教育、大学院との関連性など、コンピテンスという視点と絡み合わせる。

質保証枠組みで例示はあっても、個々の大学がカリキュラムをデザインするに際してあくまでも参考としてであり、拘束することのないよう配慮する、となっている。展望の教養教育の方は、どのように書き込むかはまだ検討中。評価については、大学評価は広がっていくものだが、イギリスの認証システムでは、多様化している中で、格上げされた旧ポリテクは評価を上げるためにせつせと評価している一方、伝統的な大学では評価に対する対応は割れている。制度を作ってしまうと大学を締め上げることになる。質保証枠組みでは、各大学のオートノミーを最大限確保することを前提にデザインをするような提案にしたい。

## 5. その他

佐藤会員から健康上の理由により長期休養する旨の発言があり、佐藤会員が担当している委員の交代が了承された。